
望む男

山内 詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望む男

【Zコード】

Z1005U

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

一等兵のレベッカは突然副官への就任の打診を受ける。上官は有名人のタイラー大佐で……。

とある軍隊に所属する大佐とその副官である一等兵の物語。中佐と軍曹シリーズ、今回は望む男に知らない女。

要説（前書き）

この作品は「上司の苦悩」に名前だけ登場したタイラー少将とレベッカ軍曹の出会いの物語。シリーズ別作品と同様、雰囲気のみのお話です。

副官にならぬかと打診されたのは、新兵と呼ばれる時期をよしやく過ぎた頃であった。

「僕ですか？」

信じられないと顎を下げ氣味に聞いたのはレベッカにしてみれば当然だつた。

そうだ、と困つた顔でうなずくのはレベッカ直属の上司であるレイリー少尉だ。

軍隊において副官というのはたつた一人の上官のためだけに存在する特別な職務。

まあ簡単に言うと公式の愛人。

自慢じやないけれど、レベッカは自分が女だと思われていないということをきつちりはつきり自覚していた。

だから、自分を”私”だなんて呼ばずに、”僕”なんて言つているのだ。

どんなに食べても太れず柔らかさのかけらもない身体。牛乳を飲むといいと聞いて腹を下すまで飲んだけれど大きくならない胸。そこそこ整つていてるくせに化粧が全く似合わないきつい顔立ち。

自分が男だったらどれほどよかつただろう。そう思つてているのはレベッカ本人ばかりではなかつた。父も母も兄弟たちも絵にかいたようなかわいい娘を求めていたから、期待に応えたかった。だが髪を伸ばしてもドレスを着てもメイクをしても、ちつとも女に見えないので。

母がブティックのショーウィンドウを眺めながらため息をつくよう

になつたのはいつからだつただろう。スカートを履かなくても何も言われなくなつたのはいつからだつただろう。髪を短く切つたら困つた顔で似合ひうねと言わたのはいつだつただろう。

多分自分は生まれてくる性別を間違えたのだ。

いつしか女として生きることをレベッカは諦めた。

だから女として求められることが少ない軍隊に職を求めたのに。何の因果か初めてレベッカを認め望んでくれたのは必死で頑張つてきた仕事ではなく、とつくの昔に諦めて投げ捨てた女という部分に対してであつた。

しかし、どうにもおかしい。そもそも副官といつのは志願制である。こうして突然話が舞い込んでくることなんてあるはずがない。さらにレベッカは一応女、というくらいのレベルであつて、とてもとても男性に好かれる要素なんて皆無だ。

「タイラー大佐は知つてゐるかね？」

「はい、存じ上げております」

タイラー大佐の名前を知らないなんてこの軍ではそれこそモグリに等しい。なぜなら彼は新兵の訓練時に教材として映像で散々見せられる程の白兵戦のエキスペートなのだ。飄々とナイフや短銃を操る姿は感動さえ覚えた。

「彼が君を望んでいるんだ」

「はあ？」

ますます間抜けな返事をしたレベッカに、ああ、少し違つた、といリーソ少尉は言いなおす。

「……君のような容姿の女性がお好みなんだそりだ」

はつきり言われてようやくレベッカは合点がいった。そりやあ志願した副官候補の女性兵士のなかに適役がいなくても無理はない。みんなむちむちぴちぴちむらむらな感じの美人ばかりだもんね。こんな胸もぺったんこ、手足はガリガリ、色気のかけらもない女なんてレベッカの知る範囲では皆無だ。

……自分で言つてちょっと懸しくなつたけど。

密かに落ち込むレベッカをよそにレイリー少尉は副官になることで得るメリットを次から次へと挙げていく。
給与・待遇・経験、どれをとっても今の環境では到底手に入らないものばかり。

……考えようによつてはいいのかかもしれない。
レベッカからすれば通常の場合副官となることの最大の「メリット」である貞操やら恋愛の自由なんかは、そもそも諦めていたもので、大事に守ってきたものでもなんでもない。

軍属の男の夢、なんて言われている副官。

タイラー大佐はそんな副官なんて必要ないのかかもしれない。
自分のような女がお好みだなんて、おそらく副官を断るために方便だろう。勝手な想像だけれど、あながち間違つてもいいはず。だつて適役がレベッカしかいないくらいだし。
きっと副官になつたとしてもせつないとお払い箱になるんじゃない?

控えめにレベッカは質問してみる。

「もしも大佐殿が僕を気に入らない場合は、どうなりますか？」

「その場合は君に慰謝料が支払われるはずだ」

慰謝料の金額はレベッカの想像よりも遥かに高い数字であった。すぐさま軍を辞めても一生食べていける。

……ちょっと、美味しい話かもしれない。

レベッカを抱ける珍妙な男なんていやしないだらう。

なら女としての名誉以外に傷つくものなんてない。どうせ軍についても辞めても恋人ができることなんてほとんど考えられないのだから、かまいやしない。

だったら捨てたも同然の女といつ立場、売つてもいいんじやない？

「……わかりました、お引き受けします」

その時レベッカの頭の中にはいずれ手に入るだらう慰謝料のことしか頭になかった。

しかしそれをだれが責められよう。

タイラー大佐の特殊な趣味など、レベッカは知る由もないのだから。

生まれてこの方20年、男性に関する経験も知識も無いから余計にそう思えるのかもしぬなかつたが、副官としての研修はレベッカの想像を遥かに上回るものだつた。今まで縁遠かつたものが津波となつて押し寄せてきたのかと思えるくらいに。

研修内容の全ては上官に尽くすために必要な知識や技能で、それは最新のメイクやファッショントリビュート情報から、料理や裁縫などの身の回りの世話をするためのスキル、さらにはベッドの中の手練手管まで多岐に渡る。

たつた一人の上官のためだけに存在する副官という役職に求められるのは愛人という身体だけの関係ではなく、母であり恋人であり妻であり、すなわち女そのものなのだろう。

しかしレベッカを驚かせ打ちのめしたのはそんな研修の内容よりもなによりも、一緒に研修を受けている副官候補生たちであった。

彼女たちの側にいるといふに自分が女として出来損ないかということを否が応でも意識せざるを得ないのだ。

華やかに装うことも出来ない。ふるいつきたくなるような身体も持つていらない。人を引き付ける美貌なんてかけらもない。

なのにそんな候補であり同性から見ても極上の美人ぞろいな彼女たちを差し置いて、レベッカは正式に副官となることが決まつてゐる。しかも上官はタイラー大佐、軍の中で名実揃つたエリートの一人だ。

本当にいいのだろうか。問いかけが頭をぐるぐると回り、そのたびに頭を振つて追い出さねばならなかつた。

何かの間違ひだからレベッカが選ばれたのだ。どうせすぐお払い箱になる。

そう思うしかなかった。

副官候補生なら全員提出するはずの誓約書、要は性的な関係を結ぶことに対するあれこれの了承、もレベッカは出してない。

だからだろうか、どうしても自分を”僕”と呼ぶことを止められなかつた。今更自分を”私”だなんて、今までの自分の全てを否定するようで嫌だつた。なぜか講師役の者たちもそれを咎めなかつた。レベッカにとつて色々な意味で辛かつた研修の最後を講師のエスティル准尉はこう締めくくつた。

「覚えておきなさい。私たちは無力だと。何の役にも立たない存在だと。

だけれど彼らの戻るべき場所としていることが大切なです。

私たちは彼らにとつて戦場を生きぬく理由になるのです。

それは他の誰にも出来ないこと。だから己を磨きなさい。

愛しい男を離さぬために。誠心誠意努めなさい。

偽りや驕った気持ちで心はつかめないのでから

……自分には偽りと打算だけしかない。

レベッカは熱心に聞き入る他の候補生たちに気づかれないように、大きく息を吐いた。

”僕”はみんなと違う 女の成り損ないだから。

全ての研修が終了した後、レベッカはエステル准尉と共にタイラー大佐の元へ向かうことになつた。タイラー大佐がエステル准尉の上官であるディオヘネス中将と共に最前線の基地にいるためだ。

副官は可能な限り上官の側にいること。そう決まつている。

舗装されていない道を軍用車が土煙を上げながら疾走していく。横に座るエステル准尉はレベッカの倍の年齢だというのに、ちつともそんな風には見えない。張りのあるなめらかで白い肌は素直にう

らやましい」と思つ。レベッカの顔には隠しようもないそばかすがある。これもレベッカが自分の容姿を貶める原因のひとつであった。

「レベッカ伍長」

エスティル准尉から急に呼びかけられて、レベッカはあわてていつの間にしげしげと眺めてしまつていた視線を外し、姿勢を正した。今回のお仕に合わせてレベッカは一等兵から伍長へと昇級している。

「そんなに見つめられると照れちゃうわ」

花が綻ぶような笑顔とは、まさにこうこうとを言つのだろう。きりりと前を見つめていた瞳が優しく細められ、レベッカに向けられる。

「し、失礼しました！」

「いいのよ、そんなに畏まらないで。基地にいる副官は今のところ私とあなただけなの。

「仲良くしましょう」

はい、と答えたはいいものの、仲良くと言われて一体どうすればいいのか。確かに同じ副官という立場ではあるがレベッカはまだ入隊したばかりのひよっこで、エスティル准尉はもうレベッカが生きてきた年数と同じ期間を軍で過ごしている先輩も先輩だ。気安くするわけにはいかない。

ぎやくにかちかちに固まつてしまつたレベッカをまるで労わるようにエスティル准尉は話し続ける。

「……あなたで3人目」

「はい」

「タイラー大佐の副官としてきた人」

「はい？」

「だからがんばって欲しいの」

につこうとほほ笑みながらエスティル准尉は簡単に言う。

「あの……、ひとつようじいでしようか」

「うん、なあに？」

「僕で3人目という」とは大佐殿の副官は、もうこじるんですね？

「いよいよ。言つたでしょ？ 私とあなただけだって」

聞いてない。

自分が3人目なんて今初めて知った。

ということはあの美女揃いの副官候補生たちの代わりってこと？

「きつと今度こそ大丈夫ね。こんな可愛い娘が来てくれたんだもの

！」

いやいや、可愛くは全くないですが。

何かがおかしい。

レベッカは当初の目論みがガラガラと音を立てて崩れしていくような
気がした。

……一体どんな人なんだ、タイラー大佐って人は。

特別（前書き）

7 / 6 追加があります。

タイラー大佐は謎の多い男である。

多いどころか謎だらけと言つていい。

レベッカは副官になる者として可能な限りの情報収集を試みたが、これまた全く個人的な情報が手に入らない。

というのも彼は中佐に昇進するまでほとんど表舞台に登場しないのだ。

軍に登録してある公式の記録を紐解いても出てくるのはせいぜい出身学校の名前やら入隊年月日、基地や部隊間の移動履歴くらいなもので、恐ろしいくらい個人としての経歴は真っ白。普通ならひとつやふたつありそうな若さゆえの過ち的なものすら見当たらない。不自然な記録とは反対に噂の類はいくらでもあった。だがそれを裏付けるものがひとつもない。

しかし彼を軍属の者なら知らないものはいないのだ。

散々教材として覆面や防護マスクをかぶった姿ではあるが目にしているし、その武勇伝を教官たちはまるで我がことのように熱弁をふるつていた。それがまるつと全て作り話というのはなかなか考えにくい。それでも、

……もしかして本当には存在しない人なのだろうか。

何しろ写真の1枚も発見できないのだ。

揺れる車内の中、ろくでもない想像ばかりが頭を巡る。

エスティル准尉が言つ「あなたが3人目」というのもよくわからない。

そもそもレベッカは副官として落第しに来たというのに。

他にも同じようなことを考えていた副官候補生がいたつてことな

か？

ていうか副官ってそんなに簡単に「ロロロロ変わるもんなの？」

軽く考えすぎていたのかもしれない。

女としての魅力なんてかけらもない自分の身体を売つて慰謝料をだけを得ようだなんて深く考えなくともうますぎる話だ。

名前だけは有名な、その実正体不明の上官の副官なんて引き受けるべきじやなかつた。

レベッカの顔から、徐々に血の気が引いてくる。脂汗まで滲んできた。

今一時の我慢だと思えたからこそ恥ずかしいを通り越して憤死しそうになりながら胸で男性を悦ばせる方法（レベッカのまな板では不可能な）だがやれと言われて半べそ状態で頑張つた（だの下半身の締りを良くするための運動（トイレの前で教官に聞き耳を立てられる）だのなんとかこなすことができたのに）。

うまい話には裏がある。諺には先人の教訓がこめられている。
何コレ、まるでホラーフィルム？

きっとレベッカが割り当てられたのは間抜けで考えなしで

速攻殺されてしまう役。

背中をじわりと嫌な汗が伝つ。

「あの、准尉殿」

「はあい、なあに？」

「副官を辞すことについては、可能なのでありますか？」

突如さつさまで周囲に花がぽわぽわと飛んでいそうな雰囲気を醸し

出していたエスティル准尉の様子が一変シンドラブリザード状態に替わった。ダイアモンドダストがきらめく極寒の地の如く。
……レベッカの質問はどうやら地雷を思いつきり踏んだらしく。

「あなた、そんな軽い気持ちで副官なんぞ務まると思つて?」

「ちつ違ひます! 僕はただ、僕みたいな女でいいのかと思いましてつ!」

胸もぺたんこ、尻もぺたんこで女としての魅力なんてゼロに等しいですからっ! 准尉殿に比べてみすぼらしすぎますから! 自分で言つていて悲しくもなるがまさしく軽い気持ちで副官になつたレベッカは慌てて言葉を重ねる。とりあえず考えなしなのは確かなので認めるけれど、着任前に死にたくない。

しかし自分を貶める言葉は本心からのものだ。その分必死さは伝わつたらしい。

言い訳は受け入れられたらしく、エスティル准尉はなんだ、とまたかわいらしい笑顔になつた。

……これで四十路とは本当に化けものである。

エスティル准尉のシン・ド・ラ・ブリザードは見る者にとてもない恐怖をもたらす。笑顔のまま周囲を絶対零度の世界に誘うその姿は教官の時に垣間見ることがあった。見たからこそわかる。その状態でまともに対峙できる人物がいたらレベッカは無条件で尊敬する。きっと上官であるティオヘネス中将だって、無理に違いない。

「そんなこと気にしなくてかまわないわ。何しきりあなたは特別だもの」

「特別、といいますと」

「通常だつたら私たち副官が上官の好みに合わせるのが当たり前だわ。

だけどあなたは違うんだもの」

「どうがどう違うというのか。女らしくないとこうだらうか。

「知りたければ、本人にお聞きなさいな」

聞き返してもエステル准尉はふんわりとほほ笑むだけで答えてはくれない。

そういうしていううちに車が目的地に着いてしまった。心の準備は全くできていない。

レベッカにはヒールの音を響かせて前を行くエステル准尉の凛とした背中をただ追うことしかできなかつた。

「あれが新しい副官かよ」

「おい、副官つて男がなれたっけ?」

「一応スカート履いてるんだから、女なんじゃねえの?」

視線とともにひそひそと、しかしつきりぶつけられる言葉はレベッカに容赦なく突き刺さつた。

副官になる前だつたら軍服の下はズボンもあつたからスカートなんて履いたのは初めてだ。

先を行くエステル准尉のしなやかな背中からまるやかなお尻、そして続く芸術品のような脚線とは比べられない自分の棒のような下半身にスカートは全く似合わない。何しろレベッカにはぐびれがないのである。スレンダーと言えば聞こえはいいが胸もお尻もペツたん

「。女装の少年兵と言われる方がまだわかる。

散々言われ続けた言葉でまた傷つくなんて、大金に田がくらんで副官なんぞになってしまったからだ。

せっかく忘れよう忘れようとしていたのに、自分が女だと、それも紛いものの女だと思い知らされる。

女という武器を完全に封印し周囲に劣らぬようにと人一倍努力をしていたレベッカは男たちからは仲間として受け入れられていた。気を使われたりはしないけれど、同列に扱ってもらえることが何よりの誇りだった。

だからこんなあからさまに自分の容姿を誹られるのは、軍人というある種特殊な仕事を職業として選んでからは無かつたことだった。

辞めよう。

副官も、軍も、辞めてしまおう。

馬鹿な選択をしたせいで、今まで築き上げてきたものを全て無駄にしてしまったんだから。

何もかも始めつからまたやり直せばいいのだ。

うつむいていた視線をまた正面に戻す。

覚悟は、決まった。

不意に扉の前でエステル准尉が立ち止る。

どうやら目的地、タイラー大佐の部屋へ着いたようだ。

「いやううよ。頑張つてね」

ドアの横に立ちこりとほほ笑んだエステル准尉の様子から、レベッカ一人で対面しなくてはならないようである。

目線で促され、レベッカは大きく深呼吸をすると、二回ドアをノックした。

特別（後書き）

なんだかレベッカよりもエステルさんが強烈ですね。

真相（前書き）

第3話に追加があります。

「どうぞ」

返ってきた声は、思つていたよりも若い。

「失礼します」

部屋へ入り、振り返つて扉を閉めて一礼。
そうしてようやくレベッカは声の主、タイラー大佐と対面した。

はずだつた。

「ようこそ、私の副官」

満面の笑みで迎えてくれたのは、レベッカへ副官なんぞにならない
かという話を持ちかけたあの人。

「……レイリー少尉？」

「そういう名前の時もあつたね」

執務机に肘をついて軽く手を握りながら、タイラー大佐は含み笑い
をこぼす。

しかし目の前にいたのはレベッカの元上官。

「ぐありふれた茶色の髪に人懐っこい少し垂れた目、背は高くも無く
低くも無く、およそ特徴というものがあまりない、男。

少尉という階級は士官学校出たてのルーキーの階級であり、レイリ

ーのようにいい年齢^{とし}の男ではよっぽど何かの事情が無ければありえない。本当のエリートたちを除いて、ルーキーたちはまず現場の洗礼を浴びるためにちよいと厳しい軍曹^{ぶか}がいる部隊に配属になる。そこで鼻をほつきり折られるかくらについていくかでその後が決まる。前者であれば早々に辞めていくか、転属願いを出す。後者であれば出世していく。どちらにしろ現場と呼ばれる下級兵士たちばかりの部隊からはいなくなる。

なのにレイリー少尉はレベッカが知る限りでは3年以上同じ部隊に所属していた。

そのためかレイリー少尉は部隊の中では”貧乏くじのレイリー”だの”万年少尉”だと揶揄されていた、はずだ。

部隊では優しかったけれど上官と下士官たちの間をおろおろと行つたり来たりするような、苦労症の人だった、はずだ。

しかし言わせて考えてみれば、レイリー少尉は不思議なくらいしおつちゅう研修だの演習だので部隊を留守にしていた。あまりにも存在感が薄かつたために、気にする人は少なかつたが。レベッカの部隊にいなかつたときは、タイラー大佐になつていたといつのか。

目を丸くして茫然と目の前にいる男を見つめる。

「そんなに目を見開いていたら目玉が落ちちゃうよ。」

何度見直しても田の前にいるのは見慣れたレイリー少尉。しかし軍服を彩る階級章は一頭の獅子に3本のサーべルを象つた、紛れもなく大佐を表すもの。

ややこしいんだけどね。とタイラー大佐は執務机から立ち上がりとゆっくりと近づいてくる。

「私には名前がいくつもあるんですよ。レイリー もそのひとつ」

気づけばレベッカのすぐそばまでタイラー大佐が近づいていた。思わずレベッカは後ずさる。だけでもドアを開けてすぐのところに立っていたものだから、あっという間に逃げ場は失われてしまう。

「じゅりりが」

本当の姿なのか。問いは形にならなかつたが、答えは返つてきた。

「どれも本物だよ、私のかわいいベッキー」

目を伏せたレベッカの顎をつかんで上を向かせ覗き込むと、タイラー大佐はまたにっこりとほほ笑んだ。

その笑顔に何故か泣きたくなつた。

レベッカを、軍に入つて一番最初に受け入れてくれたのはレイリー少尉だつた。

女のくせに、女の分際で、そんな言葉を跳ね返すつもりでがむしやらになつていていたレベッカの肩をぽん、と叩いて「いつもよくやつてくれてるね、ありがとう」とただ当たり前に労つてくれた。とても些細なことだつたけれど、女なのに、とか女の割にとか、そんな言葉はくつつけずにただ行為だけを評価してくれたのがどれだけ嬉しかつたことか。

いくら頼りなくて情けない上官でも、恋愛的な意味は全くないが、レベッカは好きだつた。

「僕を、騙したんですね、少尉」

「騙したわけじゃないよ、ベッキー。黙つただけさ。

それに万年少尉のままじゃ君を手に入れる事なんてできないだ
らう?」

「うだか。レベッカは軽蔑の色を露わすに言ひ放つ。
どの口でレベッカに副官の話を告げたのやう。

「僕で3人目と聞きました。

僕なんかよりよっぽどいい副官をお持ちでしたでしょ?」

「うん、我慢できなかつたから」

「はあ!?

「君が、いちにんまえ一等兵になつてくれるまで、もつまへて長くて、待ち切れ
なかつたんだよ」

だから代わりにね、お願ひしたんだ。レベッカつて名前の副官を。
……”レベッカ”という名前は全く珍しくもなんともない。探さず
ともあつさり見つかるだう。

しかし、そのためだけにあの美女揃いの副官たちを2人も自由にして
いたのか。あまりのことにレベッカの頭は真っ白になつた。馬鹿
だろ?か、この男。

それを許す上層部も上層部だ。しかしそれはタイラー大佐は馬鹿の
ような我儘が許される男ということである。

「君を見た時、もう僕の理想が服を着て歩いているのかと思つたよ

「……男がお好きだつたんですか」

副官となる前のレベッカはお世辞にも女と思えるような格好も行動

もしていない。

うつとりと言い募るタイラー大佐に、レベッカは冷たく返した。

「やれやれ、君は本当に自分の価値をわかつていな『娘だねえ』」

タイラー大佐は面白そうに目を細めると、掴んでいた顎をまたぐい、
と引き寄せる。

「これからゆつくり教えてあげよう。私がどんなにベッキーを愛し
ているか」

レベッカの反論は、タイラー大佐の唇で塞がれた。

真相（後書き）

なんか中途半端な感じですが終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1005u/>

望む男

2011年7月6日20時44分発行